

近世の戦衣の特徴とその文化史的意味 —外国染織の影響を中心に—

長崎巖

1. はじめに

本論文は、研究課題「近世戦衣の素材・技法・意匠における外国染織の影響に関する研究」の成果をまとめたものである。「服飾」に関する研究は、単に「衣服」そのものの形状や模様、模様を表すために用いられる技法等を理解するだけでは不十分であり、それらがどのように着られたのかという「服装」としての特徴を把握することが必須である。また、ひとつの文化現象としての「服装」は、その背景に民族としての「文化」や、その中に存在するいくつかの社会階層の「価値観」が顕現したものでもある。

本論文では、そうしたことを踏まえて、研究成果を、収集したデータの箇条書きといったような形の報告に終わることなく、それらを「服飾」としての特徴や存在意味の理解に結びつけて記述したいと考える。

具体的には、まず戦衣を使用した武家の存在を歴史的に把握したうえで、武家服飾の特徴とその反映物としての広義の戦衣について述べていく。そのうち、各作品の調査等を通して明らかになったことを、陣羽織と鎧下着などにおける舶来染織品・服飾品の影響として述べる。

2. 武家と甲冑及び戦衣

平安時代中期以降、社会の混乱の中で身を起こした武家は、その末期には実質的な力を誇示するようになり、やがてその身分を確立し、幕府を開いて鎌倉時代が始まった。一時的に天皇による親政（建武の新政）があったとはいえ、南北朝時代を挟んで室町時代に至り、政治における武家の力は大きく拡大し、世は完全に武家のものとなった。

しかしその一方で、室町時代末期には、将軍の力の衰えとともにその権威が失われ、武家同士が争うことが多くなった。そして将軍家の家督争いに端を発した応仁の乱は、武家が武力のみによってその存立をはかる時代の始まりを意味していた。ここに至って、武家勢力の地方分立が著しい状況となり、各々が自らの居住地域から周辺地域への勢力拡大を経て、最終的には天下取りを目指す戦乱の時代に突入したのである。

「戦国時代」ともいわれる室町時代末期から桃山時代にかけて、武家男子の服飾は時代相を反映して、特に武具や戦衣において顕著な発達を見せた。甲冑や陣羽織、具足下着はその代表的なものである。

2.1 当世具足

甲冑は、武器による敵の攻撃から身体を守る防具であり、武器の発達と戦闘形式の変化に従って変遷してきた。「当世具足」とは、戦国時代の人々から見て「当世（現代の意）」の「具足（甲冑の意）」という意味で、室町時代後期から桃山時代に生じた鎧の形式である。武器が弓矢・刀剣・槍から鉄砲へと進歩し、戦闘形式が個人戦から集団戦に変化したのに伴い、それまで主流であった胴丸・腹巻に取って代わって現れた甲冑で、機能性・生産性を重視し、板札（いたざね）や蝶番（ちようつがい）を用いるなどの工夫が見られる。

防具としての物理的実用性を追求する一方で、その装飾にも見るべきものが多いことも、当世具足の特徴といえる。個性的な装飾は、合戦規模の拡大により、戦場での自己顕示を第一の目的として行われたもので、新しい技術や素材の使用でそれまでにない奇抜・華美なものが作られるようになった。時代を反映して、西洋甲冑の影響が見られるものもあり、また西洋甲冑を部分的に流用したものも見られる。「南蛮胴具足」と呼ばれるものがこれである。

当世具足には、顔面と喉を防御する「面頬（めんぼお）」や「垂（たれ）」、肩部を被う「当世袖」、脚部を被う「佩楯（はいだて）」、腕と臍を守る「籠手」「臍当（すねあて）」など、「小具足」が付属していた。付属する兜には、伝統的な星兜・筋兜のほか、頭形兜（ずなりかぶと）、変り兜など様々な形式が見られ、実用性を追求する一方で装飾性も重要視されていた。

2.2 変り兜

戦国時代から江戸時代初期にかけて当世具足とともに用いられた兜を一般に「当世兜」と呼ぶが、兜の正面や側面、背面にさまざまな形の「立物（たてもの）」を付けたものや、兜鉢自体に加工を加えて何らかの形に造ったり、あるいは「張貫（はりぬき）」とよばれる張子で作った様々な形の飾りを取り付けるなど、意匠を凝らした兜を、特に「変り兜」と呼んでいる。

立物は取り付ける場所によって、兜の前面に付ける「前立（まえだて）」、側面に付ける「脇立（わきだて）」、後部につける「後立（うしろだて）」に分けられる。

2.3 陣羽織

陣羽織は、戦国時代に生まれ、桃山時代を経て江戸時代末期に至るまで、武家が常備しておくべきものとして、刀や甲冑とともに常に用意されていたものであった。従って男子が誕生するとすぐに、祝いを兼ねて幼児用が新調され、元服や家督相続の際にはさらに大人用が調整された。戦国時代に当世具足と呼ばれる軽便な鎧が出現したのに伴って、その上に羽織って防雨・防風・防寒などに用いた衣服で、武将が甲冑をすでに着用しているとき、主に野外の陣中や馬上で着用した。

戦国時代から桃山時代にかけての陣羽織は、実戦に使用される機会が多かったことから、麻や和紙といった実用第一の素材を用いたものが制作された。しかし同時に、戦場において部下に対して自己が健在であることを示す標識として、また主人に対しては自己の活躍をはっきりと認識させるため、視認性が高く、個人が特定できるような、派手な色や奇抜な模様を用いたものが多く見られ

る。

戦国時代には当然実用性に重きを置く傾向が強かったと考えられるが、西洋人との接触が生まれた桃山時代には、貿易によって海外の織織品が豊富にもたらされたことから、江戸時代初期にかけて、輸入された多様な素材を用いて斬新な意匠の陣羽織が多数制作された。

2.4 胴服

胴服（「どうぶく」または「どうふく」と読まれる）は、主に外出時や野外で小袖の上に羽織るコートのようなもので、もとは「道服」と表記され、上半身を覆うものであることから、後に「胴服」とも記されるようになった。ただし、現在胴服に分類されているもののうちには、江戸時代に「はおり」と呼ばれ、「羽織」「羽折」と表記されているものに該当するものも少なからず含まれていると考えられる。現在われわれが「羽織」として認識しているものは、まさにこれに当たるものである。

一方、前述の陣羽織のうち袖付きのものは、戦時に鎧の上に胴服を羽織ったところから、その用途が戦衣に特化して生まれたと考えられ、胴服の形を残したまま、使用する生地や仕立てを実用的なものへと変化させていったと思われる。

そもそも胴服と陣羽織は桃山時代においては用途的に非常に近い関係にあったため、胴服そのものが陣羽織の役割を果たすこともあったと推測される。

2.5 具足下着

具足下着は、鎧が簡略化して具足になってから、その下に着用するものとして鎧直垂に代わって使用されるようになったもので、形の上では、身体活動に便利なよう筒袖状のものが多く、また首周りの保護機能を求めて立ち襟形式が一般的である。全体的な利便性と西洋文化への憧れから、南蛮服の影響を感じさせるものもしばしば見られる。

下着としての実用的な面はもちろんのこと、その模様には武運を祈念し、神仏の加護を求める内容を含んだものも見られる。例えば、般若心経を木版で一面に刷りだしたものや、母親の形見の小袖裂を使って仕立てたものなどは、仏や肉親の加護を期して工夫されたと想像される。

3. 戦衣に求められた機能とファッション性

陣羽織や胴服に限らず、刀剣や甲冑・鞍も含めて戦に関わるこれらのアイテムは、戦国武将にとって、実用的な要件を満たすための様々な工夫とともに、重要なファッション・アイテムとなっていた。これらのアイテムが「もののふ」としての武家にとって実用第一であったことは当然のことであるが、これらはまた、個性的であることによって、戦場において主君に自らの働きぶりをアピールする役割や、家臣に対して自らの健在を示す役割をも持っていた。

それゆえ、武将たちは自分や他の武人が身につけるものに強い関心を持っていたと考えられる。それは当時の武家の日記や戦記などに、有名武将たちの服装や出立、武装が詳しく記されているこ

とからも明らかである。

『板坂ト斎覚記』（板坂朴斎著・文政10年〈1827〉）には、「慶長元年、秀頼公三歳、上洛、（中略）家康公は大きな黄の紋付候青染の道服、赤き裏の袴を召、利家は黒き縹子の道服袴、兩人ながら馬上にて高く御咄、諸大夫装束著したるを供に連御通」と家康が当日着用していた衣服について具体的な記述が見られる。

徳川家康は、大きな黄色の紋の付いた藍染の「道服」、前田利家は黒縹子の「道服」を着て、馬上にあったという。このうち家康の胴服は、辻が花染で模様と紋を表わしたものと想像され、また大きな紋を付けている点で、現在東京国立博物館所蔵となっている「水浅葱練緯地蔦模様三葉葵紋付辻が花染胴服」との共通性が感じられる。

命をかけた戦いの日々の中で、武将たちは自身のアイデンティティーを確認し、また人々に自らの存在を知らしめるために、個性の表現として武器・甲冑・戦衣などに美意識を注ぎ込んだであろう。

武将たちが群雄割拠した戦国時代も、やがて織田信長を経て、豊臣秀吉、徳川家康による国内平定によって終焉を迎える。永禄11年（1568）に織田信長（1534-82）が室町幕府最後の将軍足利義昭を擁して入京し、信長の後を継いだ豊臣秀吉（1536-98）が天下を取り、徳川家康（1542-1616）が江戸幕府を開くに至るが、それ以前の戦国の世にあっては、武将たちは己の生き様の表現のひとつとして、戦場での装いに大いに個性を発揮した。

その野放図な行動で「バサラ者」と呼ばれた信長は、ユニークな発想と大胆な行動で最初に天下を制した武将であるが、同時に、最初のファッション・リーダーというべき人物でもあった。天正9年（1581）2月28日に正親町天皇の前で行なわれた「馬揃え」（阅兵式）では、参加する武将たちに美装を凝らすよう指示し、自らも非常に美しく華やかな軍装で臨んだと伝えられている。

『信長公記』（太田牛一著・慶長5年〈1600〉頃）巻十四には、「（天正九年）三月五日、從禁中御所望に付て、又御馬めさせられ、此時者御馬揃之中之名馬五百余騎を寄せさせられ、御装束者黒キ御笠に、御ほふこふ何れもめさせれ、くろき御道襖に御たち付、御腰蓑させられ候之也」とあり、信長は、黒の「道襖」（胴服）に裁着袴（カルサン）という出立である。

信長はまた南蛮趣味で知られ、当時信長が所有していたフェルトの帽子やピロードのマントはポルトガル宣教師から贈られたと考えられるもので、軍装ではないが、信長のファッションを窺う手がかりになる。ピロードのマントの一つは現に上杉謙信に与えられているし、フェルトの帽子は前田利家の家臣村井長八郎に与えられている。

このほか信長が着用した個性的な戦衣・武器類としては、下記の作品などがあげられるであろう。

資料1 揚羽蝶模様鳥毛陣羽織（伝織田信長所用）

桃山時代・16世紀 東京国立博物館蔵

上半身には、山鳥と考えられる鳥毛を和紙に挟んで瓦を葺くように貼り付けて、濃い藍色地に白く蝶模様を表わしている。下半身には中国よりもたらされた唐花模様の唐織を用い、裏地には同じ

く舶来品である海気(かいき)を使用し、全体に袷仕立てとしている。

『武徳編年集成』(木村高敦著・天明6年〈1786〉)巻十五には、「天正三年六月、酒井左衛門尉、奥平九八郎ハ、神君ノ命ニテ岐阜ニ至ル、信長厚ク接待セラレ、(中略)唐織ノ胴服ヲ信昌ニ賜リ」とあり、家康の命によって酒井忠次とともに信長のもとに遣わされた奥平信昌に対し、長篠の合戦の武功を賞嘆して唐織の「胴服」が下賜されたという。

秀吉もまた信長以上に派手好きであったようであるが、その様子は以下の作品を見れば明らかである。

資料2 色々威二枚胴具足(豊臣秀吉所用)

桃山時代・16世紀 名古屋市秀吉清正記念館蔵

豊臣秀吉画像に描かれている具足がまさにこれである。胴を紫と縹に威分け、草摺は紫、袖は朱とした華やかな具足である。袖には桐紋、草摺には沢瀉紋を銀板で大きく表わす。兜は、僧侶がかぶる帽子形に白いヤクの毛で表わした払子形を添えて、いっそう華やかな印象を与える。ヤクの毛はポルトガル経由でもたらされたものであろう。

資料3 銀伊予札白糸素懸威胴丸具足(伊達正宗所用)

桃山時代・16世紀 仙台市博物館蔵

天正18年(1590)小田原平定後、奥州に向かった豊臣秀吉を宇都宮で出迎えた伊達政宗に秀吉が与えた鎧である。胴は銀箔押し革製の伊予札を白糸で威し、猩々緋羅紗の脇当を付ける。兜には熊毛が貼られ、前後に扇形の前立が付けられている。羅紗は当時ポルトガルを通じて日本にもたらされていたが、特に猩々緋の羅紗が武将たちに好まれたことは、宣教師の日記や江戸時代初期のオランダ商館長の日記にも見える。

このほか、戦衣に用いる意匠に軽妙さが見られる点に信長との趣味の違いが見られる。「黒羅紗地富士御神火模様陣羽織」(大阪城天守閣蔵)(資料20)などの陣羽織には、それが窺われる。

また、インド木綿を用いたキルト生地で作られている「白木綿地桐紋付陣羽織」(嘉麻市蔵)(資料32)やベルシャ絨毯で作られていた「鳥獣模様綴織陣羽織」(高台寺蔵)(資料31)、「花卉模様天鷲絨陣羽織」(名古屋市秀吉清正記念館蔵)(資料45)など、甲冑以外のものに、舶載された素材を用いたユニークな逸品が多く見られる。

『太閤記』(小瀬甫庵著?・寛永2年〈1625〉)巻十八には、「竹中半兵衛 此竹中は濃州菩提の城主にして、安藤伊賀守が掣なり、(中略)戦場之出立は、(中略)餅の付たる青黄の木綿筒服を長々と打はをり、ゆらりゝゝと打見えしなり」とあり、「餅の付きたる」とは紋が付いていることをいい、当時として舶載品であったと考えられる木綿で作られた紋付の「筒服」(胴服)を着用して、戦場の出立としていたことがわかる。ただしここでは「筒服」と記されているが、前述のように使

用状況からこれが陣羽織であった可能性もあり、そうであればそれは上記の「白木綿地桐紋付陣羽織」(資料32)に近いものであった可能性がある。

家康は、イメージとしては地味な印象があるが、着用していた甲冑や陣羽織にもそうした傾向が窺われる。

資料4 重要文化財・伊予札黒糸威胴丸具足(齒朶具足)(徳川家康所用)

桃山～江戸時代・16～17世紀 久能山東照宮博物館蔵

徳川家康が関が原の合戦で勝利した時に着用していたとされる鎧で、黒漆塗り素懸け威の胴に大黒頭巾形の兜を合わせる。齒朶の前立が添えられているところから、「齒朶の具足」と呼ばれている。四代将軍家綱のときから、この具足を模して「御写形」と称して、毎年正月の具足祝いの日に江戸城黒書院に床飾りするのを例とするようになったという。

資料5 熊毛植黒糸威具足(徳川家康所用)

桃山～江戸時代・16～17世紀 徳川美術館蔵

家康が三河時代以来、数十回にわたって使用したといわれるもので、その獐猛で威圧的な姿が実戦のイメージを喚起する。特に兜は大きな水牛の角形を立て、熊毛を貼って威容を示す。シンプルな胴も熊毛を貼って勇猛な印象を与える。

【利家卿夜話】(村井長明著・文政3年(1820))下に、「太閤様坂本の古城の跡へ、御鷹野に出御の時、内府様(徳川家康)大納言(前田利家)を初め、国大名端々に供奉被成候、其時平塚と申者など、鳥を手取に仕、太閤様御機嫌能候時、俄に風雨故、直に坂本へ御座被成候に付、何れも馬上にて御供被成候、家康は油道服を召候へば、風にさゝめき吹立候へば、御馬驚き足をためず蒐出、既に御落馬可被成體に候、其夜の御咄に、内府に似合ぬ濡に候、大事の油道服さりとはと被仰候」とあり、秀吉の供をして鷹狩に出かけた家康が馬上で「油道服」を着用している。これが風にはためいて馬が驚いたというから、「油道服」は、桐油を沁み込ませた和紙で仕立てた胴服のことであろう。

また、【白石先生紳書】(新井白石著・享保10年(1725)頃)巻七に、「一丁酉(享保二年)十月八日に谷来りし時に語りしは、堺に西宗奥と云しもの、初めは九郎兵衛と申て、茶の湯の事に名を得しものにて、太閤にも、東照宮にもしろし召れしものなり。その子孫の家に、今も太閤より賜し道服あり。萌黄の金織物にとび色の裏なり。綿は少し入りたり。東照宮より賜りし御道服といふものは、もとは紫色にや、今はとび色のやうに見へ侍り、縹紗なるにこれもとび色の表(「裏」の誤写か)とするにて、綿少し入られたり。今の製とは替り、袖は二つながら一幅半にて、四角なるが少しまろく見へて、袖口も狭し、胸紐も裏(「表」の誤写か)のきれをもつけ、紐といふものにしたる也」と見える。

秀吉から拝領した「道服」(胴服)は、表地が「萌黄の金織物」、鳶色の裏地を付け、薄く綿を入れるという。表地に見られる「金織物」は舶来の金襴であろう。これに対し、家康から拝領した「道服」は、表地は、もとは紫色であったと思われるが現在は鳶色で、しほのある薄手の生地。裏地も鳶色で、薄綿を入れ、袖は一幅半で、袂に少し丸みがあり、袖口を小さく仕立ててある。また、表地と共裂の胸を付けるという。

秀吉と家康の好みが対照的であったことは、上記の記述からも窺うことができるが、胴服は染で模様を表すものが多いため、家康所所用のものも、外見上大胆で華やかなものが多く残っている。

これら三人の武将のほか、上杉謙信や伊達政宗、前田利家、黒田長政などが使用したと伝えられる甲冑や陣羽織・胴服などにも、時代性とともそれぞれの武将たちの好みや美意識が反映されており、多様な個性が感じられる。

(上杉謙信)

資料6 重要文化財・白練緯地雲龍模様胴服(上杉謙信所用)

室町～桃山時代・16世紀 上杉神社蔵

白の練緯地に描繪の技法で、雲龍模様が実にダイナミックに描かれている。写実にこだわらず、むしろ意匠的な面白さを意識して描かれたと思われる。他の胴服に較べて小柄である点に特徴がある。また意匠も他の胴服に較べて勇ましいものであり、陣羽織として使用されたものかもしれない。

資料7 重要文化財・浅葱綾地竹雀丸文縫胴服(上杉謙信所用)

室町時代・16世紀 上杉神社蔵

明るい浅葱色の練緯地に、刺繍で三つ盛の竹丸文と雀二羽を組み合わせた紋を都合七箇所表わす。紋所の位置が三箇所ないし五箇所に着していく以前の過渡的な状況を示している。襟裏には紅練緯地に摺箔で立涌模様、摺箔と描繪で桐模様を表わしている。

(伊達正宗)

資料8 黒漆五枚胴具足(伊達政宗所用)

桃山時代・16世紀 仙台市博物館蔵

雄大な金の弦月形の前立が全身の黒漆地に映えて印象的である。鉄板五枚で構成される五枚胴具足であり、この形式は仙台藩で多用されたため、「仙台胴」とも呼ばれる。伊達政宗の所用として最もよく知られるものである。

資料9 黄金ブローチ(伊達政宗所用)

桃山時代・16世紀 仙台市博物館蔵

11個の黄金の小円を環状に並べ、青銅製のピンをつけている。伊達政宗が愛蔵していたもので、

小さな磁石とともに革の小袋に入れて、正宗の廟所である瑞鳳殿に埋葬されていた。

(前田利家)

資料 10 金小札白糸素懸威胴丸具足 (前田利家所用)

桃山時代・16世紀 前田育徳会蔵

形はシンプルであるが絵金地の華やかな胴丸具足である。胴は本伊予札を素掛威とし、漆を塗って金箔を押す。兜は鬨斗烏帽子形で金箔押し、綴の上からヤクの白毛を鉢の周囲にめぐらしている。天正12年(1584)九月の末森城の戦いで前田利家が着用していたと伝えられる。

資料 11 雲龍紋蒔絵朱鞘大小拵 (前田利家所用)

桃山時代・16世紀 前田育徳会蔵

柄は大小とも、金の薄板を鮫皮状に打ち出した豪華なもの、鞘は朱漆塗に平蒔絵で雲龍模様が表わされている。前田利家所用とされ、桃山時代らしい華やかさを持っている。

また、甲冑を一目見てその武将が誰であるかがわかるほど、武将の間で認知されていた甲冑もあった。さらに、それを贈答したり下賜したりして、その武将の用いたものが武士の間で流行することもあった。

資料 12 黒糸威胴丸具足 (本多平八郎忠勝所用)

桃山時代・16世紀 個人蔵

徳川四天王の一人、本多平八郎忠勝所用。角形の脇立と獅嚙形の前立を配する兜に、黒糸威のシンプルな胴の二枚胴具足であるが、肩から掛けた金箔押しの数珠とともに、忠勝の肖像画にも描かれている。無類の強さを誇った武将のこの甲冑姿を遠くから見た敵将はすでにそれだけで怖気づいたことであろう。

資料 13 黒糸威胴丸具足 (小具足付) (黒田長政所用)

桃山時代・16世紀 福岡市博物館蔵

銀箔押一の谷形兜とともに「黒田長政像」に描かれている甲冑で、兜は一ノ谷の断崖を表わしている。もともと福島正則所用であったが、長政のこれも有名な「黒漆塗大水牛脇立桃形兜」と交換したものである。いくつかある一ノ谷兜の本歌ともいべき作品である。

一方、水牛の脇立を付けた桃形兜も複数存在しており、これも長政の武勇にあやかって武将の間で多く用いられた。伝浅野長政所用の「大水牛脇立付兜」(大阪城天守閣蔵)・桃山時代(16世紀)もその一例である。

4. 室町・桃山時代の戦衣と舶載染織品

前述のように、戦国時代の陣羽織は、当然実用性に重きを置く傾向が強かったと考えられるが、新たに西洋人との接触が生まれた桃山時代には、貿易によって海外の染織品が豊富にもたらされたことから、江戸時代初期にかけて、輸入された多様な素材を用いて斬新な意匠の陣羽織が多数制作された。

生地では主として中国から伝わった金襴や緞子などのいわゆる名物裂系の染織品と、南蛮船によってもたらされた羅紗・ピロード・綴織・更紗などのヨーロッパ・東南アジア系の染織品が主流となった。特に羊毛製品である羅紗は、実用性においても保温性に優れ、また装飾的な効果も大きかったことから、やがて陣羽織の主要素材として定着し、江戸時代になっても、オランダとの貿易を通じて輸入が続き、長く用いられた。特に猩々緋（真紅）の羅紗は、当時の武将たちが特に好んだ生地で、江戸時代の末期に至るまで、耐えることなく輸入された。さらに変わったものでは、獣毛や鳥毛も陣羽織の加飾のための素材として用いられた。

4.1 桃山時代・江戸時代前期の陣羽織と舶載染織品

これまで行った実物作品調査、及び公開されている図録・報告書などの資料から収集した作品情報に基づいて、舶載染織品が使用されている陣羽織や胴服・鎧下着について、その事例と詳細を以下に紹介する。基本的には、使用されている舶載生地や素材ごとにグルーピングしている。

ただし、ピロードはポルトガル人が南蛮貿易によってより大きな利益を得ようとして、ヨーロッパから製品をアジアまで輸送するのではなく、中国においてヨーロッパ製のピロードを模織させたものが、桃山時代に日本に多くもたらされたことが明らかになっている。以下に示すものでも、調査によりこうしたことが明らかになっているものがある。

(1) ヨーロッパからもたらされた染織品が用いられている戦衣

資料14 白天鷲絨地胴服 (南部家伝来)

桃山時代・16世紀 盛岡市中央公民館蔵

桃山時代から江戸時代にかけて伝来した絹ピロードには、わなを切ったものと、長く残したものとがあるが、この胴服は約4センチの長い毛足をもつもので、この種のピロードは桃山時代末期に中国明からもたらされたと考えられている。

仙台市美術館蔵「御物之帳」は、伊達家の家臣が伊達政宗の身の回りの品を書き留めた目録であるが、その中に「御物之分」として、15種、18領の胴服が記されている。これを見ると、正宗用に仕立てられたもののほかに、「御遣どうぶく」と呼ばれ贈答用に制作されたものがあったことや、これらを仕立てるために、様々な国産生地のほか、「せてん」(サテン)や「ひろうと」(ピロード)といったヨーロッパあるいは中国からの輸入品、また「かみこ」(紙子)や「皮」なども用いられていたことがわかる。仕立てには裕とひとえのほか、襟に身頃や袖とは異なる生地を用いたものもあったことがわかる。

資料 15 桐紋付陣羽織（毛利輝元所用）

桃山時代・16世紀 毛利博物館蔵

毛利輝元が豊臣秀吉から拝領したとされる陣羽織である。表地の大部分が失われているが、上半身は黄ビロード地に桐紋を切りつけ、下半身には赤地花唐草模様緞子を裨をとって付けている。

資料 16 薄黄コールテン地鍾馗模様陣羽織（前田利家所用）

桃山時代・16世紀 前田育徳会蔵

表裏ともにポルトガルからの輸入品と考えられるコールテン地を用いている。表地には刺繍で悪鬼・悪魔を調伏するという鍾馗を大きく力強く表わしている。刺繍は利家夫人まつが手ずから施したという言い伝えがある。天正13年（1585）、秀吉が左々成政を打つため遠征する途上、加賀を訪れたとき、前田利家はこの陣羽織を着て、加賀の松任にて秀吉を迎えたという。

資料 17 猩々緋羅紗地木瓜桐模様陣羽織（伝織田信長所用）

桃山時代・16世紀 大阪城天守閣蔵

織田信長が豊臣秀吉に与えたものと伝えられる陣羽織で、猩々緋羅紗地に白羅紗で桐模様と木瓜紋を表わす。桐は動きに富んだ配置に置かれ、ダイナミックな印象を与える。

これに関連して、『立入左京亮入道隆佐記』（『故事類宛』「服飾部」巻13所載）に、「又三月（天正九年）五日に御馬乗有之、はや馬共をすぐられ、三百余騎にて、くろき赤き頭巾思々出立、どうふく皮袴立付にて、御見物者、御方之御所様御忍にて、（中略）并秋田城介殿（信長子信忠）はしやうゝゝ皮の御どうふくに、同ずきん、黒皮袴、其外思々御馬乗に御出候」と記されている。

乗馬の際に織田信忠が、「しやうゝゝ皮」（猩々緋）の胴服を着用したとあり、これはポルトガル人手を経てヨーロッパからもたらされた緋羅紗で仕立てられた胴服であろう。

資料 18 重要文化財・猩々緋羅紗地遠鎌模様陣羽織（小早川秀秋所用）

桃山時代・16世紀 東京国立博物館蔵

秀吉の養子で、後に安芸の小早川隆景の養子となり、慶長2年慶長の役に総大将として出陣した小早川秀秋（1577～1602）所用と伝えられる陣羽織。猩々緋は、コチニールという動物性染料で染められた鮮やかな緋色（赤色）のことで、南蛮船によってもたらされた。模様は緋羅紗地に、鎌の柄の部分では黒羅紗をアップリケし、刃の部分では白羅紗を切り嵌めて表わし、立体感を出している。赤と黒の鮮やかな配色と大胆な意匠構成が特徴的である。

資料 19 猩々緋羅紗地鋸歯模様釘抜き紋付羽織

江戸時代・17世紀前半 個人蔵

猩々緋羅紗地の裾部に鋸歯模様、背に大柄な家紋を切り填めて表している。生地は羅紗を模様の

形に切り抜いて、そこに別の色の羅紗をはめ込む技法は、鋸の歯に似た模様とともに、桃山時代から江戸時代初期にかけて盛んに用いられた。

資料20 黒羅紗地富士御神火模様陣羽織 (豊臣秀吉所用)

桃山時代・16世紀 大阪城天守閣蔵

黒羅紗地に黄色の羅紗で表されているのは富士山と考えられる。噴火して立ち上る煙を白羅紗、火山弾と思われるものを黒羅紗で軽妙に表している点がおおらかで、この陣羽織の魅力となっている。「霊峰富士」と呼ばれるように、富士山は古くから日本人の信仰を集め、様々に模様化されているが、生死のかかる戦場で着用される陣羽織に、神の加護を求めてこうした模様を表すのは、人の心の自然なあり方であろう。

資料21 黒羅紗地山形模様陣羽織 (伊達政宗所用)

桃山時代・16世紀 仙台市博物館蔵

黒と緋色の羅紗を雁木形に組み合わせた上に金モールを放射状に配した大胆な意匠が特徴的である。もとは襟ぐりと袖周りに黒平絹の鬘襟が付けられていたといわれるもので、南蛮服飾の影響も大きい陣羽織。伊達政宗所用がうなずかれる斬新な作品である。

資料22 黒羅紗地日の丸模様陣羽織 その1 (池田利隆所用)

桃山時代・16世紀 林原美術館蔵

黒羅紗地に柘榴牡丹模様を織り表わした緞子地を切り付けて大きな日輪模様を表す。襟裏には萌黄地菱繫模様錦を付ける。備前池田家三代池田利隆(天正12<1584>~元和2<1616>)所用と伝えられる。

資料23 黒羅紗地日の丸模様陣羽織 その2 (池田利隆所用)

桃山時代・16世紀 林原美術館蔵

前者と同様、日輪模様を切り付けて表わしているが、この作品では白緞子地が用いられている。形状は、前者の陣羽織が前を大きくあけた仕立てになっているのに対して、本作品は前を合わせられる仕立てになっている。桃山時代の袖無形陣羽織には、これら二つの形式が見られ、気温や着用条件を考慮して使い分けられていたものと考えられる。利隆所用のこれら二点も、こうしたことを配慮して同時に発注し仕立てられたものと思われる。なお、日輪模様は他にも同時代の陣羽織に見られ、当時の流行意匠であったと考えられる。

資料24 黒羅紗地陣羽織 (徳川家康所用)

桃山~江戸時代・16~17世紀 徳川博物館蔵

表地に黒羅紗、裏地に萌黄地牡丹唐草模様金襴を用いて袷に仕立てられている。背の中央に大き

く白羅紗で葵紋を表わしている。徳川家康の遺品の分与目録である「東照宮御讓品御入記（江戸の分）」（徳川博物館所蔵）に「東照宮御召一陣羽織」と記されている。

資料 25 黒羅紗地輪違紋付陣羽織（小堀遠州所用）

江戸時代・17世紀 東京国立博物館蔵

小堀遠州所持と伝えられる。猩々緋羅紗地卍紋付陣羽織、小紋染の鎧下着、マンチラ、鎧とともに伝存している。江戸時代になっても、武将が常備すべきものとして、鎧とともに陣羽織が求められていたことがわかる。襟部分には中国から輸入された生地が用いられ、必要に応じて、糸で縫いつけられている水牛の角製のボタンをはめはずして、襟を開けたり閉じたりできるようになっている。

資料 26 黒羅紗地陣羽織（片倉重長所用）

江戸時代・17世紀 仙台市博物館蔵

背面と襟には黒羅紗を用い、前面と背面の裾には木綿糸で幾何学模様と草木模様、人物模様などを縫い取り風に織り表わした生地を用いて、南蛮服風に仕立ててある。この陣羽織は、伊達家の重臣、片倉重長所用とされ、同家では、伊達政宗の命を受けてローマへ赴いた支倉常長が持ち帰ったものと伝えられている。

資料 27 白羅紗地陣羽織（南部利直所用）

桃山時代・16世紀 盛岡市中央公民館蔵

比較的珍しい白羅紗地の陣羽織である。現在脱落しているが、焦茶色の裏地を付けて袷に仕立てられていたと考えられる。盛岡藩初代、南部利直（治世期間 慶長4年—寛永9年）所用と伝えられるもので、陣羽織の制作年代は、慶長期と推測される。

資料 28 樺色羅紗地水玉模様陣羽織（阿部忠秋所用）

江戸時代・17世紀 白河集古苑蔵

白河藩の藩祖、阿部忠秋が寛永10年（1633）の徳川家の馬揃の際に着用したと伝えられる陣羽織である。外形は桃山時代から江戸時代初期に流行した袖の下方と裾が鋭角的に広がったもので、これに琥珀色の大きな水玉模様が大胆に散らされている。戦国の余風を残す大胆な意匠である。

資料 29 白羅背板地陣羽織（山内忠義所用）

桃山時代・16世紀 土佐山内家宝物資料館蔵

羅紗よりも薄手の毛織物である羅背板を用いて仕立てたもので、山内一豊の甥で、養子となり山内家を継いだ忠義が用いたものとされている。忠義は徳川家康の養女を夫人とした。

資料30 重要文化財・紺羅紗地袖替陣羽織（上杉謙信所用）

桃山時代・16世紀 上杉神社蔵

胴体部に紺羅紗、袖部に緋羅紗を用いて「袖替り」の形式に仕立ててある。衣服の背面で地色や模様を替える形式を「片身替り」といい、桃山時代の小袖形衣服に多くはないが見られるが、この胴服に見られるような袖替りは知られていない。配色も非常にすっきりとして力強い。なお、裏地には萌黄地菊牡丹模様の綴子を付けている。

(2) 南東アジアからもたらされた染織品が用いられている戦衣

資料31 重要文化財・鳥獸模様綴織陣羽織（豊臣秀吉所用）

桃山時代・16世紀 高台寺蔵

絹糸を用いた綴織で、一部に金銀の平金を粗く巻きつけたモール糸が用いられている。オランダのハーグ市に伝えられている類品によれば、生地はサファヴィ朝ペルシャ製のカーペットであったと考えられる。

資料32 白木綿地桐紋付陣羽織（豊臣秀吉所用）

桃山時代・16世紀 嘉麻市蔵

白木綿地に幾何学的な花文をいわゆるキルティングの技法で織り表わした生地で仕立てられた陣羽織。木綿はインドで生産され、ヨーロッパに輸出されていた。ヨーロッパで始まったキルティングは16-17世紀頃特に盛んに行われていたから、この生地もヨーロッパから日本にもたらされたものと考えられる。背中央には猩々緋羅紗で桐紋が大きくアップリケされている。

資料33 白木綿地幾可学鋸齒模様陣羽織（山鹿素行所用）

江戸時代・17世紀 松浦史料博物館蔵

白地に丸文を中心とする模様と赤地に鋸齒文表わした模様とが組み合わされた広幅生地で仕立てられている。意匠の特徴から、インドにおいてインドネシアに輸出するために制作された更紗であることがわかる。海気の裏を付け、袷に仕立てられている。山鹿素行所用と伝えられる。平戸藩主、松浦鎮信が素行と親しい関係にあったことから、これが平戸藩松浦家に伝来したのであろう。

資料34 浅葱麻地九曜紋付具足下着（細川忠興所用）

桃山時代・16世紀 島田美術館蔵

浅葱麻地に九曜紋散の模様を小紋染で白上げに表し、さらに背面中央に大きく九曜紋を藍で染め出す。襟は茶ビロードの立襟に金糸で菱繫模様を織り表し、金モールで縁を包む。細川忠興所用と伝えられる。

(3) 中国からもたらされた染織品が用いられている戦衣

資料 35 黄地牡丹唐草模様緞子陣羽織 (豊臣秀吉所用)

桃山時代・16世紀 東京国立博物館蔵

桃山時代の武将で茶人でもあった富田左近將監が、豊臣秀吉より拝領したといわれている。緞子は紋織物の一種で、経糸と緯糸に練糸を用いた縞子組織の先染絹織物で、起源は中国とされ、わが国では天正年間(1573~92)に堺で中国・明の織技を学んで始まったといわれる。

資料 36 重要文化財・金銀欄緞子等縫合胴服 (上杉謙信所用)

桃山時代・16世紀 上杉神社蔵

16種類の金欄・銀欄・緞子・縞子を切り継いで一領の胴服に仕立てている。胴服の背面も前面も10本の縦筋が並列する意匠構成となっていて、その中にこれらの裂がランダムに配されているため、一見非常に複雑な意匠構成に見える。高価な舶来の生地を惜しげもなく用いた実に贅沢な衣裳である。

ルイス・フロイス(1532~97)は、永禄5年(1562)来日し、九州や京都を中心に布教活動を行い、慶長元年(1596)日本で亡くなっているが、その間、信長や秀吉に謁見し、天正13年(1585)には『日欧文化比較』と題する記録を残している。そうした中で、「われわれの間では綴布はきわめて下等なものである。日本では貴人が全部綴布でできている着物または胴服を大いに尊重する。」と記しているが、謙信所用とされるこの胴服はこれに類するものと考えられる。

資料 37 白地雲模様緞子具足下着

桃山時代・16世紀 紀州東照宮蔵

徳川頼宣が大坂夏の陣で着用したと伝えられるもので、紀州徳川家に伝来した。雲模様を表わした緞子は、白地雲模様緞子襟巻(資料53)に使用されているものと同じである。

資料 38 紅地牡丹唐草模様縞珍具足下着

江戸時代・17-18世紀 東京国立博物館蔵

表地に、紅地に金糸と萌黄・白・紺・浅葱・黄などの色緯を織り込んで模様を織り表わした縞珍を用い、綿入れ袷仕立てとしている。

資料 39 紅地桐鳳凰模様縞珍マンチラ

江戸時代・17~18世紀 東京国立博物館蔵

模様は異なるが、紅地牡丹唐草模様縞珍具足下着と非常に類似した模様と色調を示す縞珍で仕立てられている。

資料40 重要文化財・紫地芙蓉唐草模様風通袴（上杉謙信所用）

室町～桃山時代・16世紀 上杉神社蔵

紫地に白で芙蓉唐草模様を表わした風通織で仕立てられた袴。風通織とは、複数用意された経糸・緯糸を表裏で別々に組み合わせ、反対の配色で組織をつくった二重組織の織物のことをいう。風通織は奈良時代にも存在していたが、この当時においては中国からの舶来品であったと考えられ、この作品も袴ながら高価なものであったと考えられる。

4.2 戦衣の一部に外国服飾の影響を受けているもの

(1) 当世具足

資料41 南蛮胴具足（徳川家康所用）

桃山～江戸時代・16～17世紀 紀州東照宮蔵

南蛮胴具足は、ヨーロッパ製の兜と胴に草摺・脇当・面頬などを付けて具足に仕立てたものである。家康は南蛮胴具足をいくつか所持しており、その中には榊原康政や渡辺守綱に下賜したものもある。この作品には、胴に強度を試すための弾痕が残っている。

資料42 南蛮胴具足（明知光春所用）

室町時代・16世紀 東京国立博物館蔵

明智光秀の従兄弟であり、娘婿であった明智光春所用と伝えられる具足である。兜は一枚の鉄板を打ち出して椎の実形に作り、前中央に鎬を立てて左右に兎耳を配している。胴は鉄の打ち出しの二枚胴で、前面には天の字と髑髏、背面には雪を頂く富士山を表わす。

資料43 南蛮胴具足

桃山～江戸時代・16～17世紀 東京都 宝仙寺蔵

輸入した西洋の鎧と兜に加工を加えたもので、この種のものには現在まで多数残っている。エキゾチックな形と実用性を備えた南蛮胴具足は、それゆえ戦国武将に非常に好まれた。

(2) 陣羽織

資料44 猩々緋羅紗地陣羽織（南部家伝来）

桃山時代・16世紀 盛岡市中央公民館蔵

桃山時代に武将たちに好まれた猩々緋の羅紗で仕立てられた南蛮服風の陣羽織。袖の部分と裾の部分が気温に応じてボタンで脱着できるようにできている。この時代にはこの陣羽織のように華やかな美を求めながらも、高度の実用性をもったものが多い。

資料 45 花卉模様天鷲絨陣羽織 (伝豊臣秀吉所用)

桃山時代・16世紀 名古屋市秀吉清正記念館蔵

マントを陣羽織に仕立てたもので、茶のピロード地に刺繍で花卉模様や唐草模様などを表わしている。ピロードはもともとヨーロッパで織られていたものであるが、桃山時代には中国でこれを模したものが多く見られるようになった。陣羽織のもとになっているマントがポルトガル製であれば、ピロードも彼地のものといえるが、確証はない。しかし戦国武将にとって、ピロードが舶来の貴重な染織品であり、またマントが憧れの南蛮ファッションであったことには違いはない。

堺市博物館には、桃山時代・16世紀の天鷲絨マントが収蔵されている。これはヨーロッパからポルトガル人によってもたらされた天鷲絨製のマントである。この花卉模様天鷲絨陣羽織はこのようなマントを仕立て替えて制作されている。

資料 46 紺羅紗地鶴丸紋付陣羽織

江戸時代・17世紀 個人蔵

洋風の襟を持ち、裏地には海気、襟裏には車に菊模様の錦を用いる。背面に鶴丸紋を配したやや大ぶりの陣羽織で、ボタンで襟を合わせて着用することのできる実用的なつくりになっている。

資料 47 茶麻地日の丸模様陣羽織

桃山時代・16世紀 東京国立博物館蔵

麻を素材とし、これに柿渋^{かきしぼ}をしみこませた、実用性の強い陣羽織。日輪の中央に「八幡大菩薩」、その左右に「慶長二年(1597)二月二十五日」と記す。慶長2年1月1日、豊臣秀吉は朝鮮再征を命じているが、この陣羽織はこれに応じて作られた可能性がある。

資料 48 茶紗地矢羽根紋付陣羽織 (斎藤利三所用)

桃山時代・16世紀 早稲田大学図書館蔵

上半身には茶色の紗地に矢羽紋を切り付け、下半身には紗地に金糸を縫い取り風に織り込んで唐花様の模様を織り表わしている。このユニークなデザインの陣羽織は、明智光秀の重臣、斎藤利三所用と伝えられるもので、桃山時代の陣羽織としては、珍しい夏季用であることが明らかな作品といえる。

形状の上では、最も実用的な袖無し仕立てのほか、袖付きのものでも脱着に容易な実用的な形状がとられていることが、桃山時代までの陣羽織の特徴ということが出来るが、これらの中には、明らかに南蛮服の影響を受けたと思われる特異な形状の袖や襟を持つものも見られる。この時代にあつては、そのような場合にも、陣羽織としての前述のような実用性は維持されており、むしろ身体の保護機能や活動性を助長するという服飾上の利点を持つものとして、南蛮服すなわちヨーロッパの衣服の一部を戦衣に取り入れていたと考えられる。

筆者は、陣羽織の発生について、小袖の上に着用する胴服を鎧の上に流用したことに始まると考えているが、この仮説に従えば、まずは袖付きの陣羽織が生まれ、やがて袖や裾が脱着できるものを介して、丈が短く袖のない陣羽織が現われ、これが多く広まっていったと推測される。

こうした変化が進行する過程で、桃山時代の陣羽織は南蛮服の影響を受けていったと思われる。それはすでにみたように、特異な形状の袖や襟を持つものが見られることから推測される。

日本の衣服が、生地を直線裁断・平面裁断して造られるのに対し、西洋の衣服は、曲線裁断・立体裁断して造られる。西洋服はそれゆえ、着用者の身体にフィットしやすく、また身体に密着しやすくする工夫も衣服の各部に見られることから、高度な活動性と身体保護機能を求められる戦衣、特に陣羽織にあっては、洋服に使用されている様々な工夫が取り入れられたと考えられる。

(3) 具足下着

資料 49 重要文化財・紺麻地鐸繫矢車模様鎧下着 (伝上杉景勝所用)

室町時・16世紀 上杉神社蔵

鎧下着は、「具足下着」とも呼ばれ、室町時代になり鎧が簡略化して「当世具足」と呼ばれるようになってから、鎧直垂に変わってその下に着用するものとして使用されるようになったものである。形の上では、身体活動に便利のように、丈が短く筒袖状に仕立てたものが多く、また首周りの保護機能を求めて西洋服飾に見られるような立ち襟形式が一般的である。

この作品もそうした特徴を示すが、模様は、防染糊を置く型紙と生地に直接捺染する型紙を併用する複雑な工程を経て染められたと考えられている。

資料 50 白緇子地牡丹唐草模様緞子具足下着

桃山時代・16世紀 土佐山内家宝物資料館蔵

牡丹唐草模様を織り出した白緇子で仕立てられた南蛮風の具足下着。襟や袖山、袖口付近に真田紐を縫いつけるなど、非常に洒落たデザインである。袷仕立て。

資料 51 白麻地梅花模様具足下着

桃山時代・16世紀 土佐山内家宝物資料館蔵

白麻地に藍の型染で梅花繫ぎ模様を表わしている。鎧からのぞく襟には納戸地桃模様緇珍が用いられている。単衣仕立て。

資料 52 縞地上衣

桃山時代・16世紀 本妙寺蔵

薄茶と紺の縦縞模様を織り出した生地で仕立てられたヨーロッパ製の上衣で、前に21個、襟に3個、袖口に10個のボタンが付けられている。襟は立襟、裾にはバスクという垂れ布がつく。

資料 53 白地雲模様緞子襟巻

桃山時代・16世紀 紀州東照宮蔵

ヨーロッパで16～17世紀頃に盛んに用いられた襜褕（ラフ）であり、東照宮では襟巻と呼ばれて伝えられてきた。使用されている緞子が同じものであることから、白地雲模様緞子具足下着（資料37）と同時期に制作されたものと思われる。

4.3 江戸時代中期・後期の陣羽織と舶載染織品

(1) 陣羽織の生地に使用される舶載染織品

江戸時代も中期になり太平の世が長く続くと、武家は実戦の機会を失い、陣羽織も実用性を失って、桃山時代におけるユニークな性格を次第に弱めていく。戦のない江戸時代においては、陣羽織も実際には戦場で着用されることがないため、戦衣としての実用性をあまり考慮せず、美しさのみを配慮して設計されるようになる。例えば、夏用の陣羽織に薄物の羅や紗が用いられることなどは、一見生地を選択が適切に行われているように見えるが、屋外の戦場での実用性ということからすれば、あまり意味のないものといえるであろう。

そして江戸時代後期には、あたかも既製服を仕立てるように、越後屋などの呉服屋で、好みの生地（毛織物が圧倒的に多い）と色（緋色が圧倒的に多い）を選び、既成の形状に仕立て、自家の紋を標準的な大きさに付けたものがほとんどとなる。江戸時代中期から後期にかけて陣羽織に用いられた生地は、羅紗（起毛した平織の毛織物）が最も多く、呉縞（起毛しない平織の毛織物）がこれに次ぎ、ヘルヘトワン（起毛した綾織の毛織物）がそれに続く。時代性が陣羽織にも強く現われているのである。またフェルト（獣毛を踏みつけ絡み合わせて布状にしたもの）も多くはないが含まれている。

羅紗は、羊毛製の厚手の平織物を起毛したものを指し、その名称は、ポルトガル語の「ラクサ」、オランダ語の「ラクシア」を日本語に転訛したもの。ヘルヘトワンも同じく羊毛製の厚手の綾織物を起毛したもので、名称はオランダ語の「ペルペチュアン」に由来する。呉縞は羊毛製の薄手の平織物で、オランダの「ゴルフグレイン」にその名の起源を持っている。

フェルトも含めてこれらの羊毛製品は、木綿製のオランダ更紗とともに、長崎のオランダ商館を通じて輸入されていたと考えられる。長崎奉行所管理のオランダからの輸入裂の見本帳には、これらの陣羽織に使用されているものに類似する羊毛製品やオランダ更紗が貼り込まれているからである。

資料 54 猩々緋羅紗地市松模様陣羽織（阿部正由所用）

江戸時代・18世紀 白河集古苑蔵

猩々緋の羅紗は桃山時代から江戸時代にかけて、陣羽織の素材として最ももてはやされ、ポルトガル宣教師が戦国武将の熱狂振りを記しているばかりでなく、江戸時代に入っても長崎のオランダ

商館を通じて大量に輸入されていた。この作品では、上半身を赤一色にするのに対して、下半身は白と黒の石畳として大胆な対比を見せている。

資料 55 紫羅背板地水玉模様陣羽織

江戸時代・17～18世紀 仙台市博物館蔵

紫地に五色の水玉模様が鮮やかなこの陣羽織は、伊達政宗所用と伝えられているが、制作年代はこれよりも下る。羅背板は毛織物の一種で、羅紗などと同様、オランダとの貿易によって日本にもたらされた。水玉は紫の生地の上にアップリケされているのではなく、切り嵌められている。

資料 56 白羅紗地帆船模様陣羽織 (前田重熙所用)

江戸時代・18世紀 前田育徳会蔵

外見上桃山時代の陣羽織に似ているが、18世紀後半以降の作品である。オランダ船と思われる帆船はエキゾチックで魅力的な意匠となっているが、この時代の陣羽織は実戦を離れた装飾性を求め、このようにユニークな作品を生み出した。前田重熙(1729-53)の所用になるもの。

資料 57 樺羅紗地網干模様陣羽織 (伝前田治脩所用)

江戸時代・18～19世紀 前田育徳会蔵

加賀前田家11代藩主治脩(1745-1810)所用と伝えられる陣羽織である。三角形を向かい合わせに二つ繋ぎ合わせたような形の背面に、網干風景を背上部の空間を生かすように写實的に表現している。桃山時代の陣羽織に見られた迫力が見られない点が、江戸時代中期以降の陣羽織の特徴である。

資料 58 猩々緋羅紗地丸紋付陣羽織

江戸時代・19世紀 共立女子大学蔵

江戸時代になっても武家は陣羽織に羅紗を好んで用いた。その中でも猩々緋羅紗は長らく人気の一位を占めて、幕末まで使い続けられた。

資料 59 黒呉縞地隅切笹紋付陣羽織

江戸時代・19世紀 共立女子大学蔵

呉縞は薄手の毛織物で、羅紗や羅背板などとともにオランダから輸入されて、主に陣羽織や火事装束に用いられた。またこの陣羽織の裏地に使用されている銅板更紗もオランダから輸入されていた。

(2) 陣羽織の形状における外国服飾の影響

陣羽織の形状に関しては、16世紀から17世紀初期には袖なし形が多くを占めていたが、17世紀

から18世紀にかけては、袖なし形と袖付き形の陣羽織が並存するようになり、18世紀後半から19世紀にかけては、再び袖なし形が圧倒的に多くなったと考えられる。また江戸時代後期の陣羽織には、桃山時代の陣羽織を復古的に模倣したものも見られるが、それらは実戦を意識したものでないために、全体に無用に長大であったり、袖の形が実用に不向きなものに改変されていたりする場合が多い。

桃山時代に流行した、南蛮服飾の影響を受けた陣羽織も、同じく復古的に再現されているが、これも実際の洋服とはかけ離れて不自然な模倣となっている。当時、長崎オランダ商館を通じて西洋服飾に関しては、十分ではないまでも、それなりの情報が得られていたはずであるが、それらの情報は陣羽織には反映されていない。おそらく、桃山時代以来各家に伝来していた古式の陣羽織を、「陣羽織雛形」などを頼りに模倣した際に、適当な解釈やアレンジを加えた結果であろう。

袖なし形の陣羽織では、江戸時代前期から「太刀受け」と呼ばれる細長い補強裂が肩山に縫い付けられることがあったが、中期から後期にかけての陣羽織においては、その幅は時代と共に漸増する傾向が見られ、19世紀にはその位置が肩の上から前身の側に移動する。それは太刀受けがその実質的な機能をまったく果たさなくなってしまうことを意味する。

また太刀受けの装飾も時代とともに変化し、19世紀には太刀受けの仕立てが複雑化して、生地を二段、三段に重ね、絹糸で縁取り、飾り縮を施すなど、非常に装飾的になった。後に軍服の肩飾りにならって「肩章」と呼ばれるようになったのも、そのためと考えられる。

そもそも「太刀受」という名がいつごろから使い始められたかは明らかでないが、桃山時代の陣羽織にはこれが見られないことからすると、江戸時代前期に平戸や出島のオランダ人の洋服の肩に「肩章」が付けられているのに影響されて始まったと考えるべきであろう。

これに加えて江戸時代後期には、蘭学などをきっかけとして、ヨーロッパの文化や知識が出版物などを通じて流入することになり、また出島のオランダ人の服装も人々の関心を集めることとなった結果、江戸時代後期の非常に装飾的な肩章が出現することになったと推測できる。

こうした傾向は「レクシオン羽織」と呼ばれる筒袖羽織の出現と理由を同じくしている。レクシオン羽織は、幕末期に西洋式練兵術がヨーロッパから導入されたとき、「だんぶくろ」と呼ばれたズボン式の袴とともに使用が始まった。

江戸時代後期の陣羽織では、形状や生地はすでに述べたとおりであるが、仕立てにも共通性が見られる。この時期の陣羽織は、その大部分が襟を返し襟（襟を外側に折り返した形で固定したもの）とし、表から見える実際には襟の裏側当たるが部分には、身頃の表地とも裏地とも異なる生地を使用するものが多くなる。この部分に最も多く使用されているのは縞珍・錦・金襴・銀襴で、オランダ更紗や羅紗に刺繍を施したものなども見られ、要するに舶載の希少な生地が用いられたのである。

5. まとめ

今改めて日本の染織の歴史を振り返ってみると、その長い道程の中に、数回に渡る大規模な海外

染織品の流入期を認めることができる。それはほぼ600~700年の間隔を置いて3度われわれの歴史の中に現れる。第一回目は飛鳥・奈良時代、中国隋・唐の文化が急速に流れ込んだ時期のことである。法隆寺と東大寺に代表される大寺院に伝来した7~8世紀の染織品の中には多くの中国染織品、あるいは朝鮮や西アジアもしくは南方からもたらされたと考えられる染織品が含まれている。素材は、綾や錦といった絹ばかりでなく羊毛を使ったフェルトや木綿なども見られ、技法も織物だけでなく、刺繍や緋など多岐にわたる。

また明らかに海外から渡来したとわかるもの以外でも、現在、法隆寺や正倉院・唐招提寺・叡福寺などに伝存している多くの7~8世紀の染織品は、これらと殆ど見分けのつかないものや、これら舶載の染織品の影響を強く受けたものである。

しかし文化の国風化が時代の特徴とされる平安時代になると、染織においても技術や意匠の和様化が見られるようになる。ここでは、奈良時代の染織が持っていた舶来染織の影響はほとんど影を潜め、それとはわからないほどほぼ完全に消化・吸収されてしまう。

次に第2回目の外国染織の大規模な流入は、14~17世紀頃にかけて起こった。すでに見てきた戦衣に使用されている舶載染織品はそれであり、西洋服飾の影響もまたこれに関連するものである。室町時代から江戸時代初期に至るこの時期は、中国では元・明時代にあたり、絹織物を中心に第1期の流入期とは異なった内容の染織品が日本にもたらされた。金襴・緞子はその代表的なものである。

またこの時期にはインドやインドネシア等の東南アジア諸国から、間道や更紗といった木綿製品、ヨーロッパから南蛮・紅毛貿易を通じて羅紗を代表とする羊毛製品がもたらされた。

これら当期の舶来染織品は、その種類と数において第1期に流入したそれよりも遥かに多く、またその時期も第1期よりも長い。従って、これらの受け入れられ方も、飛鳥・奈良時代においては舶来染織品が皇族やこれに近いごく一部のの人々や寺院でのみ用いられたのに対し、この時代の舶来染織品は、社会のかなり広い階層に渡って普及し、それ故に日本の染織技術や意匠に与える影響も一層大きなものとなった。

これに続く外来染織品の第3の流入期は、いうまでもなく明治時代である。この時代の特徴は、欧米から流入した染織品の影響によって、技術においても意匠においても、その後の日本の染織が大規模に変化してしまったことである。すなわち、ごくわずかに江戸時代以来の伝統的な染織品が残った以外は、ほぼ完全に西洋風の染織が一般化し、以後現在に至るまで、それが日本の染織の主流となってしまふ。

このように見てくると、飛鳥・奈良時代においては、舶載裂が急速に受け入れられた一方、これに決別するのも早く、その影響も長く続いてはいない。また明治期においては、外来染織が日本の染織に影響を与えたというよりは、これに取って替わり、伝統の染織を失わせることとなった。

これらに対して、室町時代から江戸時代にかけての外来染織品は、受容が持続的であったため、日本の染織に大きな影響を与えながらこれと融和し並存していた点が特徴的である。

それゆえ、戦衣に限らず、近世の日本染織を理解するためには、同時期における舶載染織品流入

近世の戦衣の特徴とその文化史的意味—外国染織の影響を中心に—

の実態とその影響に関する調査・研究が欠かせないのである。